論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目　　ゴシック期フランスにおけるトリフォリウムの建設に関する基礎的研究

氏　　名　　嶋﨑　礼

ゴシック建築の壁の厚みの内部に作られた「トリフォリウム」と呼ばれる通路状の部分は、建物の内部空間に向かってアーケード状に開き、立面のデザインにおいて重要な位置を占めている。全てのゴシック建築がトリフォリウムを有するわけではなく、12 世紀後半にフランス北部ピカルディー地方周辺からシャンパーニュ地方やノルマンディー地方へと伝播し、13 世紀以降ブルゴーニュ地方やフランス南部、そしてヨーロッパ各国へと広まったという経緯を持つ。当初は単純な半円アーチや尖頭アーチからなるアーケードがほとんどであったが、時代と共により装飾的で複雑なトレーサリー（網目石組）を用いたデザインが主流となった。このことからトリフォリウムはその装飾的価値や様式の伝播を裏付ける手がかりとしての面が着目されてきた。

しかしながらトリフォリウムは構造的に複雑であり、その役割も一概には捉えられないため、立面だけを比較分析したのでは捉えきれない部分がある。さらにトリフォリウムは部材が多様でその数も多いため、ゴシック期の特徴としてこれまで指摘されてきた部材の規格化の過程を追いやすいという可能性が考えられる。一つの建築の中での建設技術の変化も反映されやすいので、トリフォリウムの詳細な調査は建物の個別研究に寄与する可能性を秘めている。本研究ではトリフォリウムの内部を立入調査することによって、一般に装飾的なものとして理解されてきたトリフォリウムの実用上及び構造上の役割を明らかにするとともに、部材のディテールや石組み、材料等の技術的変遷を検証する。

申請者が把握したフランス国内の 150 件程度のトリフォリウムのうち、27 件の建物のトリフォリウムに立入調査を行い、石組みや金属部材などの技術的特徴を精査する。その際、トリフォリウムの寸法（通路の内寸、小円柱の高さ等）を計測し、グラフ化して分析することで規則性や部材の規格化の程度を検討する。それらを異なる建物の間で比較し、ゴシック期を通じた変遷を調べる。

ノワイヨン大聖堂とラン大聖堂のトリフォリウムを特に詳細に調査する。具体的には、通路の幅や小円柱の寸法を計測することを通して、部材加工の精度が工期によって異なるかどうかを検証する。また、足場を固定する穴や職人の残したサイン、部材の一体構築など、特殊な建設技術が用いられている部分を記録する。

トリフォリウムはゴシック期を通じてその外見も構造もゆるやかな発展段階を踏んだ。ロマネスク期にはノルマンディーやイングランドのいくつかの建物の袖廊などで内陣と身廊のトリビューンを連絡するために部分的に用いられるに過ぎなかったトリフォリウムは、12 世紀半ば以降急速にフランス各地に広まり、建物の主廊部分を占めるようになる。

トリフォリウムに観察される建設技術は、同時代のゴシック建築の建設技術と密接にかかわっている。例えば、1200 年前後に大アーケードの柱の間、クリアストーリーの窓面、屋根裏など建物の各所で増加した金属材（補強鎖、鎹、太柄等）はトリフォリウム内部においても増加した。4 m 近いトリフォリウムの規模を維持しつつトレーサリーを用いた繊細な構造を実現することができたのは、金属材あってこそのことだったといえよう。

標準化も重要である。部材のシステマティックな規格化・標準化はゴシック期の特徴として従来から指摘されてきたが、トリフォリウムは部材が多様でその数も多いため、規格化が適用されやすいといえる。ランス大聖堂では背後の壁や天井の石材まで一定の寸法に定められていた。板石のアーチやトレーサリーの組子も規格化と関係が深い。特にトレーサリーは規格化のノウハウが蓄積されていたからこそその普及が促進されたようにも思われる。

また、トリフォリウムの多様で複雑な部材は一つの建築の中での建設技術の変化を反映しやすい。石積みや柱頭彫刻、通路の寸法、小円柱の高さの規則性などを詳細に調査することによって、トリフォリウム階における工期の切れ目や職人集団の交代の可能性を検討することができ、地上階とトリフォリウムの建設にどの程度のタイムラグがあったかを検証することができる。

トリフォリウムの通路内部の精査は、ゴシック建築の建設技術や建設段階の解明に寄与する可能性を秘めている。